

3155

検香にゆく (八月二十三日)

甲斐下りも

体と心ツク 流れはいい

考を己の心 入らぬの心を

メが赤々として かりの心をしる

それと 終れば 上々

とにか 検香にゆく

焚き火の心 心の予

行つて おどろいた

田舎者の心

石を見ても 左を見ても

石を見ても 左を見ても

石を見ても 左を見ても

石を見ても 左を見ても

石を見ても 左を見ても

石を見ても 左を見ても

石を見ても 左を見ても

石を見ても 左を見ても

石を見ても 左を見ても

三ニサツ山家ハ

津管が身ヲ

八一三ノ孔をちつて

シニサツ家ニ行く

明石安堂

日頃の人といけ席しが去る

それ等どけ秋城と同じ

千ヨクと乗て 巨岳は?

梅壺と身長は

舞術し此ニとアリ有年か

一人一人乗て さいに行く

先左の説明 いでも又いたくする

その時日 救急車

皆同じに

アいていてくた息よ かたつて行くは

身アア新れろテウ 身りがとう

多子 夕かよに笑言とに報告する

娘番 有んこ こんちんた

こつはり つかれん

2025
12/23